

## 「生」と「死」のイメージ調査の基礎的分析

渋谷 園枝, 渋谷 昌三

「生」と「死」のイメージとその人自身の環境や経験との関係を分析した。

調査Iでは、SD法を用いて、大学生の持つ生と死のイメージを測定し、自殺念慮との関連をみた。その結果、自殺念慮を頻繁に持つ人は、死のイメージと生のイメージが重なる点が多かった。

調査IIでは、医学部1年生と3年生を対象に、「生」と「死」のイメージを自由記述法で調べた。解剖実習などの経験の有無と、生と死のイメージの関係を分析した。さらに、文科の大学生についても、同様の調査を行なった。その結果、文科の学生では、生と死のイメージ語数に差がみられなかった。しかし、医学生では死に関する語数のほうが多く、とくに、1年生にその傾向が強かった。また、医学生生の生と死のイメージ語の内容分析から、生も死もほぼ同じ次元で認識されていることが推測された。

キーワード：生のイメージ, 死のイメージ, SD法, 自由記述法

### 1. はじめに

つい先頃までは、「生きがい」ということが人々の大きな関心事であった。現在、ひところほどではないにせよ、「生きがい講座」をはじめさまざまな形で定着した感がある。いいかえると、これは、どのような「生」を送りたいか、という問題意識の現われと考えるとよいであろう。

また、最近では、「死」についての考え方や死に対する対処の仕方などがいろいろな形でクローズアップされてきている。

こうした事柄を考えるにあたって、案外見過ごされがちなのが、それぞれの人が、生や死というものをいったいどのようにとらえているかという点である。その人の描いている「生」あるいは「死」に対するイメージによって、その対応の仕方もおのずから違ってくるはずである。

もちろん、生や死にたいして、多くの人に共通するイメージもあれば、それぞれの人の内的な問題や、環境・経験などによって特有なイメージもあると考えられる。

ここでは、医学部の学生と文科の学生を対象に、それぞれのもつ内的な問題や、環境・経験によって、生や死に対するイメージがどのように異なるかを比較検討してみた。

### <調査I>

#### I. 目的

生と死のイメージを、イメージ測定の有効な方法とされるSD法で回答してもらおう。同時に、自殺未遂や自殺念慮の有無、健康の程度、死との接触の有無についても回答してもらい、それらと、生・死イメージとの関連をみた。なお、本調査は渋谷(1984)<sup>1)</sup>の研究に基づいたものである。

この報告では、自殺念慮の高さと生・死イメージとの比較をとりあげた。仮説として、自殺念慮の高い人は、自殺念慮の低い人より、死を肯定的なイメージにとらえている、と考えた。

#### II. 方法

被験者は、文科の大学生70名、そのうち男性は41名、女性は29名であった。調査の方法は、教室で、いっせ

表1 SD法で用いた4因子の項目内容

<p><b>MORAL CORRECTNESS</b></p> <p>a おっとりしたーすぐれた                  b 矛盾したー一貫した                  c 貧弱なー立派な                  d まちがったー正しい                  e わるいーよい                  f ぼんやりしたーはっきりした                  g 迷惑なーありがたい</p>	<p><b>SENSORY PLEASURE</b></p> <p>h 愉快なー不愉快な                  i 楽しいー苦しい                  j あかるいーくらい                  k 気持のよいー気持の悪い                  l やわらかいーかたい                  m すきなーきらいな                  n 白いー黒い</p>
<p><b>POTENCY</b></p> <p>o 消極的ー積極的                  p 狭いー広い                  q 小さいー大きい                  r 弱いー強い</p>	<p><b>ACTIVITY</b></p> <p>s はげしいーおだやか                  t すばやいーのろい                  u 活動的ー不活発な                  v 危険なー安全な</p>

いに、質問紙に回答してもらおうというものであった。質問内容は、以下のとおりである。

- (1)自殺を試みたこと・考えたことの有無と、考えたことの頻度を問う7項目（択一）
- (2)被験者自身の病気やけがの経験とその軽重を問う3項目（択一）
- (3)他人の死の直接的経験の有無、身近な人の死の直接的・間接的経験の有無（複数回答）
- (4)「死」という言葉のイメージを柏木(1963)<sup>2)</sup>の意味構造の4因子論に基づいて、SD法22項目（MORAL CORRECTNESS 7; SENSORY PLEASURE 7; POTENCY 4; ACTIVITY 4）で7件法で問う
- (5)「生」という言葉のイメージを(4)と同じ項目について7件法で問う（項目内容は表1に示した）

III. 結果と考察

1) 自殺未遂・自殺念慮の有無の内訳は、未遂者2名(70名中、以下同じ)、少なくとも一度以上は自殺を考えたことがある人は38名、まったく考えたことがない人は30名であった。つまり、1度でも「自殺」ということを考えたことのある人は、6割弱いたことになる。

2) 自殺未遂者は男女各一名であった。この2名をのぞいた68名を、自殺念慮の高さによって、以下の4群に分けた。

図1 死・生のイメージの平均プロフィール

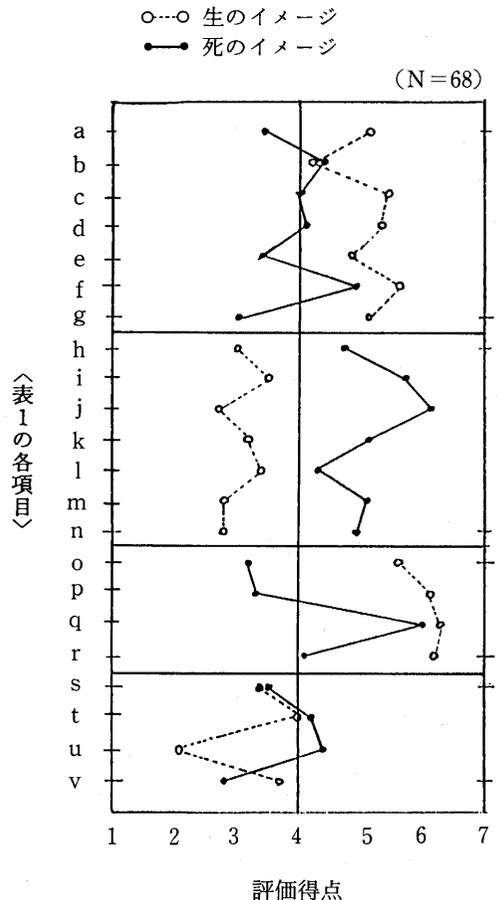
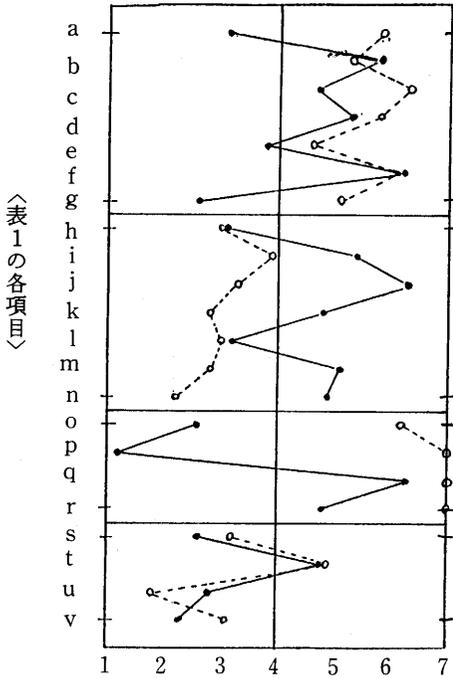


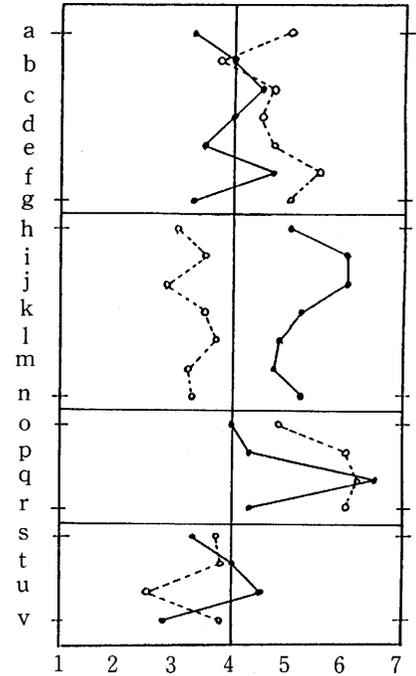
図2 自殺念慮の高さ別の死・生のイメージ・プロフィール

○---○ 生のイメージ  
●---● 死のイメージ

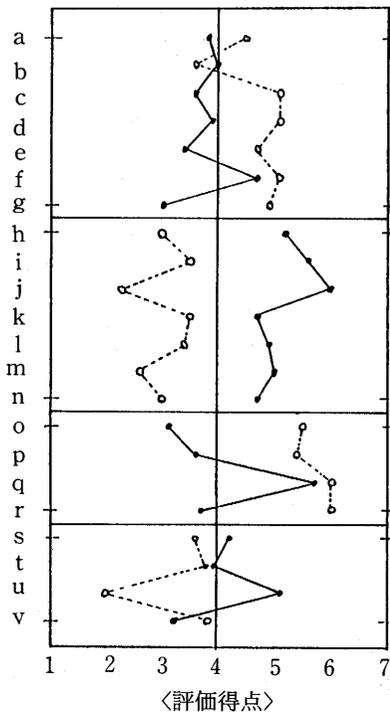
<2-a> 自殺念慮H群



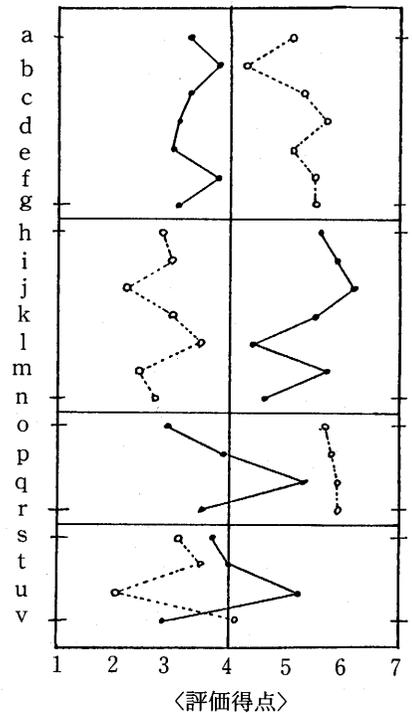
<2-b> 自殺念慮M群



<2-c> 自殺念慮L群



<2-d> 自殺念慮N群



〈評価得点〉

〈評価得点〉

「毎日」から「月1回」の割合で自殺を考える人をH群（5名）、「年1回」をM群（6名）、「少なくとも一度は」をL群（27名）、「一度も考えたことがない」人をN群（30名）とした。

ここでは、この4群の生・死イメージの比較を報告する。

3) 平均的な「生」のイメージおよび「死」のイメージ・プロフィールは、図1に示すとおりであった。項目の順序は、表1に示したとおりで、因子ごとに4つに分けられている。

この平均的プロフィールは、図2と比較すると、M群、L群に近いものとなっていることがわかる。

4) 自殺念慮のH群、M群、L群、N群のグループ別の生と死のイメージのプロフィールは図2-a, 2-b, 2-c, 2-dに示されるとおりであった。

N群では、生のイメージと死のイメージがかなりはっきり分かれている。どちらも「大きい」問題としながらも、全体としては、前者はプラスの、後者はマイナスの存在としてイメージされているのが読み取れる。

自殺念慮が高い群になるにつれ、どのような違いがみられるかを因子ごとにみていく。

MORAL CORRECTNESS 因子では、L群、M群ともに、ある程度、生はプラスの、死はマイナスのイメージでとらえながらも、どちらもより中間点寄りのプロフィールとなっている。つまり、生と死のイメージが似かよっているといえる。

それにたいし、H群では、生はN群よりさらにプラスのイメージでとらえられている。一方、死のイメージも生のイメージも重なるように肯定的にうけとめられている。これは、ことに、b, c, d, fの項目にあらわれている。つまり、死は「一貫した」「立派な」「正しい」「はっきりした」存在としてとらえられている。

SENSORY PLEASURE 因子をみると、M, L, N群いずれも、生は、より「愉快的」「楽しい」「あかるい」「気持ちよい」「やわらかい」「すきな」「白い」存在として、肯定的にとらえられている。死のイメージも共通して、より「不愉快的」「苦しい」「くらしい」「気持ち悪い」「かたい」「きらいな」「黒い」存在として否定的にとらえられている。

ところが、H群では、死は「愉快的」「やわらかい」存在として肯定的にとらえられ、生は、「苦しい」「く

らしい」方向、つまり否定的にうけとられる兆しがみとめられる。

POTENCY 因子をみると、生は4群ともにPOTENCYの高い存在としてとらえられている。死のイメージで、4つの群に共通しているのは、死は「大きい」存在だということである。プロフィールの形はH群だけ非常に異なっており、死を「消極的」で「狭い」ものとしている。なお、自殺念慮が高い群になるにつれ、死を「強い」ものと感じる傾向がみとめられる。

ACTIVITY 因子をみると、M群、L群、N群では、生は「活動的」なもの、死は「不活発な」ものとしてとらえられている。ところが、H群では、死は「はげしい」「活動的」なものと考えられると同時に「のろい」存在とも考えられている（こうした傾向はM群にも少し認められる）。生にたいしても同じことがみとめられる。また、自殺念慮が高い群になるにつれ、生もまた「危険な」存在と考えられる傾向がある。

5) 自殺念慮の高い人は、自殺念慮の低い人やまったくない人にくらべ、死にたいしてより肯定的なイメージをもっていた。この点で、仮説は支持されたといえる。

ことにその傾向は、MORAL CORRECTNESS 因子とSENSORY PLEASURE 因子によくあらわれていた。

また、POTENCY 因子やACTIVITY 因子の内容から、H群の特異な特徴が明らかになった。つまり、死を「大きい」「強い」とイメージしながら、同時に「消極的」で「狭い」ものとうけとる、いわゆるアンビバレンツな状態に陥っているという点である。

これは、「はげしい」「活動的」な死から逃れようと、ことさら死を狭小化しているためとも考えられる。

6) この調査では、SD法を用いることで、内的要因（ここでは「自殺念慮の高さ」）の違いにより、生および死についていただくイメージがどのように異なるかをみた。

しかし、生および死のイメージはこうした一般的な方法ではかりきれぬものなのか、具体的にはどのような言葉で生や死はイメージされるのか、生および死特有のイメージ語というものはあるのか、ということが疑問として残った。そこで、こうした点をよりはっきりさせたいとして行なったのが調査IIである。

< 調査 II >

I. 目 的

この調査では、SD法のような形容詞ではなく、生および死のイメージをたずねられたとき、具体的にどのような言葉を思い浮かべるのかを調べようとした。あわせて、経験・環境によってそうした言葉の内容がどのように異なるかをみようとした。

調査の対象となったのは、医学部の学生と、文科の学生である。

医学部の学生では、その在学年数の違いにより、また、解剖実習をささむことで、生および死にたいくイメージがどのように異なるかをみようとした。また、文科の学生のたいく生および死のイメージも調べ、医学部の学生の内容との比較を試みた。

II. 方 法

調査対象となった被験者は、国立医科大学学生110名（1年生（以下医1）52名、3年生（医3）58名）、私立大学文科の学生85名（1年（文1）37名、2年（文2）33名、3年以上（文3）10名、不明（文不明）5名）であった。

調査方法は、教室で、全員いっせいに回答してもらった質問紙法で、質問内容は、「生」（あるいは「死」）から連想される言葉（名詞・動詞・形容詞等など）を自由に記入してもらった（自由記述法）というものであった。

なお、記述に関しては、「青—空—雲……」というように連想でつなげることは避け、あくまでも、「生」「死」そのものから直接連想される言葉で書いてほしいと依頼した。

III. 結果と考察

1) 今回の調査では、書き出してもらった語数を制限しなかったため、表2-a、表2-bに示されるように、記述した語数の少ない人と多い人ではかなりの差がみられた。

大半の人が、死のイメージ語のほうが、生のイメージ語の数より少し多い程度でバランスがとれていた。しかし、なかには、死に関する語数が圧倒的に多く、生に関する語の数はわずか、という人も若干見受けられた。

回答した語数の多かった人は、この問題に関心があるか、あるいは、現在こうした問題を含むならかの課題に向き合っている可能性があると考えられる。

表2-a 医大生の「死・生」イメージの記述語の数

	医1		Total	医3		Total
	死	生		死	生	
Total	327	223	550	289	208	497
M	6.3	4.3	10.6	5.0	3.6	8.6
Max	38	8	44	20	20	40
Min	1	1	2	1	1	2

注)「医1」は医学部1年生をさす。

表2-b 文科の学生の「死・生」のイメージの記述語の数

	文1		Total	文2		Total	文3		Total	文不明		Total
	死	生		死	生		死	生		死	生	
Total	214	198	412	176	147	323	54	52	106	26	16	42
M	5.8	5.4	11.1	5.3	4.5	9.8	5.4	5.2	10.6	5.2	3.2	8.4
Max	32	21	53	15	13	28	12	11	23	9	5	14
Min	1	1	2	1	1	2	1	2	3	1	1	2

注1)「文1」は、文科の1年生をさす。

注2)「不明」は、学年無記入者をさす。

語数が少なかった人は、「関心がない」という人もいるであろうが、なかには、関心を向けたくない、あるいは、関心があるからこそかえて書くことを拒否してしまったという人もいるのではないかと推測される。

2) 一人当たりの記述語数(平均値)は、表2-a、表2-bに示される通りであった。

全体的に、「生」を表わす語より、「死」を表わす語のほうが多く記述されている。ただし、文1・文3では、生と死の記述語の数にほとんど差がみられない。それにたいし、医1では、死を表わす語が生を表わす語の1.5倍弱、医3ではほぼ1.4倍であった。

医学部では、医3は、生・死ともに語数が医1の8割前後となっている。文科では、文3は、文1に比べ、若干少ない程度(9割強)である。

医1と文1を比較すると、死のイメージ語数は、文1のほうが少ない(9割ほど)が、生のイメージ語数は、文1のほうが多い(1.3倍弱)ことがわかる。

医3と文3では、文3のほうが、生のイメージ語数(1.1倍弱)、死の語数(1.4倍強)ともに多いことがよみとれる。

文科の学生では、生・死のイメージ語数がほぼ同じであるのに、医学部生においては死の語数のほうが多い。この理由として、医学部生は、医学をこころざしている点でもともと死にたいして関心が高い、また、解剖実習や専門教科を通して、「死」をより身近に感じることが多い、などが考えられる。

また、学年が上がっても、文科の学生では生・死のイメージ語数にほとんど変化が認められないのにたい

し、医学部生では、学年が上がると、むしろ記述語数が減っている。これは、専門教科を学んだために、かえてそれぞれのイメージが固定化されてしまうためではないかと考えられる。

3) 記述語数ではなく、記述語の種類(同じ語は頻度にかかわらず一つと数える)をまとめたのが表3である。

この表から読み取れるのは、語の種類の高さの比較である。

被験者数が異なるために、単純に比較はできないが、一人当たり、何種類の語を考えつくかという観点からみると次のようなことがよみとれる。

医1と医3では、生のイメージの語の種類の高さはほぼ同じだが、死のイメージでは、医3のほうが医1より少ない(9割弱)。

文1と文3では、生・死どちらのイメージも文3のほうが豊富(どちらも1.2倍強)である。

医1と文1では、文1のほうが生・死どちらのイメージの語の種類も豊富(生1.3倍弱、死1.6倍強)であった。

医3と文3でも、文3のほうが生・死どちらのイメージの語の種類も豊富(生1.8倍弱、死2倍強)であった。

4) 医1および医3の書き出した死および生のイメージの記述語を頻度順に、内容別にまとめてみたのが表4、表5である。

5) 全体的に、死の記述語の種類のほうが多かったにもかかわらず、生に比べると分類しやすかった。

現実の「生」は、身近で具体的であり、実に多岐にわたっている。それにたいし、「死」は、まだそれほど

表3 「死・生」のイメージ語の種類数

	医1	医3	文1	文2	文3	文不明
n	52	58	37	33	10	5
死	160	152	142	100	46	22
生	120	129	138	85	45	16
Total	280	281	280	185	91	38

具体的ではなく、身に引きつけにくい。そのため、知識や抽象論としてとらえがちである。

こうした違いから、生のほうは共通の語がまとめにくく、死のほうはまとめやすかったのではないと思われる。

6) 回答の中味を見ると、自分自身にとっての生や死を書く人もいれば、客観的・一般的反応としての死や生、つまり「他人の」死や生を書く人も、また、最近の経験の反映らしく具体的な事柄を羅列する(たとえば「葬式」の項)人もいて、というようにその人によりさまざまで、こうした観点から一つの方向にまとめることは困難であった。

そこで、死および生をどのような時点でとらえているかという観点からまとめると次のようになった。

死のイメージは、「死を迎えるまえの状態」「まさに死、その一点」「死後の状況」「死そのものの特質」、生のイメージは、「現時点」「始まりの一点」「未来」「生そのものの特質」というそれぞれ4つの立場から記述されていることがわかった。

この4つの立場は、岸本<sup>3)</sup>が概括した死生観の4類型、すなわち、

- I. 肉体的生命の存続を希求するもの
- II. 死後における生命の永存を信ずるもの
- III. 自己の生命をそれに代わる限りなき生命に托するもの
- IV. 現実の生活の中に永遠の生命を感得するものと相通じるものがある。

つまり、この4つの立場のどれを重視するかで、その人の死生観が定まってくるともいえる。

7) 表4の死のイメージの記述語を共通点のある項目ごとにまとめ、複数回答語の多かった順に並べると次のようになった。

1. 宗教的な意味合いのある語 (No. 1)
2. 身体的な死に関連する語 (17)
3. 死を感覚的にとらえたもの (26, (8), 9, 10, 19, 32)
4. 死を感情的にとらえたもの (8, 28, 33)
5. 葬式にまつわる語 (27)
6. 自然死・病死以外の死 (3, 4, 11, 21)
7. 時間・空間に関する語 (15, 18, 20, 25)
8. 活動性の有無を表わす語 (31)
9. 死に立ち向かう語 (24)

10. 人間に関する語 (29)

11. 「死」のもつ性格を表わす語 (13, 14, 22, 23, 34)

12. 死により生じる現象 (7, 30)

13. 自然に関する語 (5, 12)

14. 音楽に関する語 (16)

15. おふぎの強い語 (26)

16. その他 (35)

8) 表5を7)と同じ手続きで並べると次のようになる。

1. 生を感情的にとらえたもの (No. 5, 7, 8, 30)
2. 生を身体面からとらえたもの (1)
3. 生を感覚的にとらえたもの (3, 12, 17, 18)
4. 活動性の有無を表わす語 (16, 20)
5. 時間・空間に関する語 (10, 19, 26, 27, 28)
6. 生まれることに関する語 (9)
7. 日常生活にまつわる語 (4, 14, 15, 29, 31)
8. 人間関係にまつわる語 (24)
9. 自然に関する語 (2, 11)
10. 宗教的な意味合いのある語 (6)
11. 「生」のもつ性格を表わす語 (13, 21)
12. 現在の状態を表わす語 (25)
13. 生に立ち向かう語 (23)
14. その他 (22, 32)

ただし、同じ語が、生と死両方にあげられている場合、まとめるにあたって、必ずしも同じように命名される項目には分類されなかった(愛・命・人生・生きるなど)。これは、生・死それぞれのイメージのなかでの統一性を第一としたからである。

9) 以上の項目のまとめ方は、きわめて主観的なものではあるが、このように分類し並べてみると、生・死のイメージともに、共通の項目名があることに気づく。

共通の項目名は、

「宗教的に意味合いのある語」(以下「宗教」と呼ぶ)  
(死の1番目、生の10番目、以下同じ)

「身体的な死・生に関する語」(「身体」) (2, 2)

「死・生を感覚的にとらえたもの」(「感覚」) (3, 3)

「死・生を感情的にとらえたもの」(「感情」) (4, 1)

「時間・空間に関する語」(「時・空間」) (7, 5)

表4 「死」のイメージ (医大生)

No	記述語	1年	3年	No	記述語	1年	3年	No	記述語	1年	3年	No	記述語	1年	3年				
①	天・天国	6	5	⑧	恐怖・怖い	11	10	⑭	病(病気)	4	7	⑳	葬式	5	9				
	地獄	3	8		苦し	3	1		ガン・癌	2	5		墓(墓場)	5	8				
	仏	4	1		絶望	1	2		血	3	2		土	1	2				
	霊(靈魂)	4	1		孤独	3			死体・死人	3	1		線香	1	1				
	神(様)	3	1		不安	2			骨	1	2		通夜	1	1				
	幽霊	1	2		痛み	1			寿命	1	1		霊柩車	1	1				
	宗教	1	1		苦痛	1			手術	1	1		布団	1	1				
	あの世	1	1		失望	1			医者	1	1		ロウソク	1	1				
	閻魔様	1	1		怖い	1	3		眠り	1	1		塩	1	1				
	別世界	2	2		嫌だ	2	2		呼吸	1	1		冷たい石	1	1				
	輪廻・転生	3	2	つらい	1	1	脳死	1	1	どくろ	1								
	悪魔	2	2	恐れ	1	1	覚醒	1	1	棺(おけ)		4							
	神の国	1	1	恐れ	1	1	安静	1	1	おぼろさん		1							
	キリスト	1	1		1	1	大往生	1	1	ハン		1							
	針の山	1	1		1	1	剖検・解剖	1		香典ドロ		1							
	十字架	1	1		1	1	停止		4	香典		1							
	蜘蛛の糸	1	1		1	1	腐敗	2	2	花輪		1							
	来世	1			4	1	遺体	1	1	もうかる		1							
	罰		2		2	1	細胞	1	1	灰		1							
	殉教		1		2		意識	1	1	火葬場		1							
死神		1		1		厭体	1	1	火葬		1								
デモス		1		1		necrosis	1	1	お経		1								
末法の世		1		1		変形	1	1	ねる		1								
黄泉		1		1		ボックリ	1	1	寺		1								
復活		1		1		病院の空番	1	1	騒		1								
②	未知	2	2	⑨	(生の終の)			⑮	終り・終結	14	6	㉑	悲しみ	8	5				
	未知の世界	1			安らぎ	4	1		終末	3	1		涙	3	3				
③	自殺	1	1		自由	2			舞台の終り	1			悲しい		4				
	逃避・逃走	3			解放	2			最後	1			なげき		1				
	手首	1			苦し	1			消滅	1			さびしい		1				
	追い詰めら	1			苦しくない	1			区切り	1			さびしい		1				
	れる				脱力	1			ending	1			おちこみ		1				
	回避	1			満足	1	1				1		うなだれる		1				
	首		1		案になる	1	1		⑯	暗闇・暗黒	10		14	㉒	家族	2			
	刃		1		新しい未来	1	1			暗い・暗	7		13		自分	2			
	毒ガス		1	美しさ	1	1	夜	1		3	おじいさん	1							
	ピストル		1	始まりへの準備	1	1	真夜中	1			おばあさん	1							
高層ビル		1		1	1	陰うつ	1			子孫	1								
遺書		1		1	1	㉓	無限・永遠	5		3	身近な人々	1							
④	殺し・殺人	3		⑩	黒・黒い		11	9		㉔	戦争	2	4		乙女		2		
	必殺仕事人	2			白・真っ白		6				戦死	1			老人		1		
	殺し屋	1			青		1				アウシュビ	1			二人		1		
	殺意	1			茶		1				ツ	1			遺族		1		
	毒	1			透明		1		爆死		1		㉕	別離・別れ	4				
	刑務所		1		紫		1	1	㉕		厳しい	1			いってしま	1			
	射殺		1		青白い		1	1			巨大	1			旅立ち	1			
	⑤	砂漠	1				白黒	1			1	重い		1		断絶	1		
		山	1				白黒	1			1	硬い		1		さよなら	1		
		風	1			⑪	事故	3			5	遠い		1		㉖	静止	6	3
水		1		交通事故	2			㉖		残酷	1			静・静寂	6		1		
空		1		激突	1		1			悲惨	1			静か	4				
雲		1		即死	1					冷酷	1			沈黙	1				
雷		1		遭難	2		2			悲劇	1			㉗	深淵		2		
暗雲		1		犠牲	1		1			無情	1		下降		1				
空気が		1		⑫	冬		1			矛盾	1		絶壁		1				
乾燥		1			枯れた		1			㉗	生	6	2		下		1		
化石	1		古い		1				愛		2		無抵抗		1				
雨	1		⑬		運命		1				勇気	1			あきらめ			2	
雪	1				必然性	1			命		1		受け入れ			1			
暗い川	1				いつかは必	1	1	生きる	1			㉘	非日常		1				
⑥	冷・冷たい	3			11	ず来るもの	1	1	人生		1				平凡	1	1		
	冷気	1				避けて通れ	1		㉘		空白・無		17		4	㉙	失敗	1	
	寒い				2	避けないこと	1	1			皆無・無				足音		1		
	⑦	人から忘れ					宿命	1			1		㉙	テニス部	1			飢え	1
		られてしま				平等	1	1			ロンバ			1			エントロピ	1	
		う			1	引き返し不	1	1		「死ね」	1				一種大		1		
		去るもの日			1	能	1	1		笑い死	1				わからない		1		
		々々にうとし		1	⑭	過去	1			追試	1			1	耳なり		1	1	
		存在が失わ		1		時	1	1		保健学	1			1	ノンビ		1	1	
		れてしま		1		突如	1	1		ダジャレ	1	1		浸透	1		1		
				⑮		テクノ	1			坂本龍馬	1	1							
						フュージョ	1												
						ン	1												
			レイエム			1	1												
			モーツアル			1	1												
			ト			1	1												
			受難曲			1	1												
			パッハレ		1	1													
			フフォーレ		1	1													
			ジョン・レ		1	1													
			ノン	1	1														



「活動性の有無を表わす語」(「活動性」)	(8, 4)
「生・死に立ち向かう語」(「立ち向かう」)	(9, 13)
「人間(関係)に関する語」(「人間」)	(10, 8)
「死・生の性格を表わす語」(「性格」)	(11, 11)
「自然に関する語」(「自然」)	(13, 9)

の10項目であった。

また、項目名は異なるが、

「葬式にまつわる語」(「葬式」)(死の5番目)は、「日常生活にまつわる語」(「日常生活」)(生の7番目)と、「自然死・病死以外の死」(「以外の死」)(死の6)は、「生まれることに関する語」(「生まれる」)(生の6)と、「死により生じる現象」(「現象」)(死の12)は、「現在の状態を表わす語」(「状態」)(生の12)と、

それぞれ内容的に対応していると考えられる。

ふざけた項目は「生」のほうには見あたらなかったが、音楽に関する語は若干みうけられた。

このようにみえてくると、「生」も「死」も、ほぼ同じような次元で考えられていることになる。

10) 学年による違いを、項目の順位(各7番目まで)という点でみてみると、次のようであった。

死のイメージでは、1年生は、第1位に「宗教」、以下「感覚」「身体」「以外の死」「感情」「葬式」「時・空間」と続く。

それにたいし、3年生では、第1位は「身体」、以下「感情」「宗教」「感覚」「葬式」「以外の死」「時・空間」であった。

また、生のイメージでは、1年生は、第1位が「感情」、以下「感覚」「身体」「活動性」「自然」「時・空間」「人間」の順、3年生でも「感情」が1番で、以下「身体」「感覚」「活動性」「自然」「生まれる」「日常生活」という順であった。

11) 項目の内容という点から学年の違いをみると次のようなことが認められた。

死のイメージについてみると、まず「身体」では3年のほうが語が豊富であった。また、死をマイナスのものとしてとらえるのに、1年は感覚的な面から、3年は感情的な面からうけとるひが多かった。「現象」のなかの語から、1年は他人の死という目で、3年は自分をも含めた目でみていることが推測された。

死のイメージは、全体的にみると、1年生では、3

年生に比べると抽象的で、感覚的なとらえ方をしている。それにたいし、3年生では、身体的な意味合いが強くなり、感情的なとらえ方も増え、具体的な語が増える。ただし、具体的になるのは、あくまでも「死」というものの存在であり、自分自身の死という意味合いは薄いと考えられる。

生のイメージでは、1年・3年ともにほぼ同じイメージをもっていた。強いて違いをあげるなら、3年生のほうが身体的な意味での「生」(生まれることを含め)を多くあげていた。

また、1年のほうが生をより「活動」的なものととらえていた。しかし、その一方で、「感情的には生に若干マイナスイメージをいっていた。3年では、生をより柔らかな存在ととらえているが、「性格」の面で若干暗いイメージをいっていた。また、「人間関係」の語からは、1年は自分中心に、3年は他人との関わりという面から考えていることが推測された。

12) 生・死のイメージにおいて、学年による違いが生じる理由として、次の二つのことが考えられる。一つは、それぞれの年度の学年の特徴に過ぎない、というものである。もう一つは、解剖実習や専門教科に接することにより生じた違いである、というものである。

この二つのうちのどちらかに限定することは難しい。今後、文科の学生との比較を通じて、その比重の違いをみることができると考えている。

なお、もし後者の比重が大きいとすれば、今後ますますクローズアップされてくるであろう死にたいする対応の仕方に関する死の教育の成果も、期待できるのではないかと考える。

13) 死というときよくあげられるものの一つに宗教があるが、ここでも、死のイメージにおいて、宗教に関連した語が、「身体」をしのいで第1位にあげられている。

しかし、生のイメージでは優先順位も低く、語数もわずかにすぎない。生と死のイメージそれぞれであげられた語の内容をみても、宗教心の深さを思わせるものはあまりみられない。

こうしたことから、宗教は生の救いというより、葬式などの儀式をするものとして意識されている存在であることが推測される。

芦崎(1991)<sup>4)</sup>は、「日本人が遺骨に執着するように、米国人は遺体に執着する」と考察している。そのため

に、「葬儀学校」には、遺体の損傷を復元したり、防腐処理をする実技があるという。

こうした文化のもとでは、葬式にまつわる項目のなかの語もまた変わってくるはずである。大きな分類だけでなく、そのなかの一つ一つの語にも、それぞれ環境や特性が反映されると考えられる。

14) 文科の学生の生・死のイメージの記述語と比較すると、医学部生のほうがどちらのイメージもより具体的であり、文科の学生はより抽象的なとらえ方をしていた。また、身体にかかわる語は、医学生のほうが豊富であった。

### <まとめ>

当然のことながら、生および死にたいする考え方というのは不可分の関係にある。死にたいしてどのようなイメージを抱くかは、そのときの生き方と深く結びついているはずである。

死および生のイメージにおいて、複数回答語すなわち共通イメージ以上に単独回答語が多いのも、それぞれの人の生きざまが実にさまざまであることに由来していると思われる。

調査IIで複数回答のあった語と、調査Iの結果とを比較してみると、生と死ではっきりイメージ・プロフィールが対照的になっていた SENSORY PLEASURE 因子と同じ語が、生・死双方であげられており、しかも回答頻度も多かった。

また、ACTIVITY 因子にあたる語も生・死イメージ両方にあげられており、やはり回答頻度が多かった。

しかし、MORAL CORRECTNESS 因子や POTENCY 因子と同じ語はほとんどなく、同じような趣旨の語が、それぞれの人がもつイメージに添った語で記述されていた。

また、生と死のイメージ語を分類(生は14, 死は16に分類された)し、それぞれに項目名をつけたところ、10項目に共通の名がつき、残りの項目のうちの3個もそれぞれ内容的に対応していた。

共通の10項目中にSD法の4因子にあたる語も入っていたが、該当する語がすべて複数回答が多い語だったわけではない。つまり、SD法の項目以外の語や項目も、それぞれの人が独自にもつ生や死のイメージを述べるのに欠かせないものだと考えられる。

こうしてみると、確かに、死や生のイメージを測るのにSD法は簡便な方法ではあったが、環境・経験・内的特性の異なる人々のもつ死や生のイメージを比較しようというときには、やはり、これだけでは十分といえないということになる。生・死イメージ測定にふさわしい質問項目を作成する必要があるとの考えを支持する結果と思われる。

そうした意味で、この研究から得られた生・死イメージに共通する13項目というのは興味深い。今後、文科の学生との比較やほかの調査を通して、こうした共通項目の存在、死の教育の可能性などを探っていきたい。

### 文 献

- 1) 渋谷園枝(1984)「生」と「死」のイメージ。日本心理学会第48回大会論文集。644。
- 2) 柏木繁男(1963)SD法による意味構造の因子論的研究。心理学研究, 35-1:27-31。
- 3) 岸本英夫(1973)死をみつめる心。講談社文庫。東京。(池見西二郎, 永田勝太郎編(1982)死の臨床。誠信書房, 東京。より引用)
- 4) 芦崎治(1991)遺体と語る。AERA, 39:80-81。

**Abstract****Basic Analysis of Life-Death Image**

Soneo SHIBUYA and Shozo SHIBUYA

We analyzed the relation between one's life-death image and one's circumstances and experience.

In study I, we used the semantic differential scale to investigate the life-death image of undergraduates, and examined the relation between their image and their degree of concern regarding suicide. The result of this study showed that those who frequently think about suicide have a death image bearing many parallels to their life image.

In study II, we investigated the life-death image of students in the first and the third year at the medical department of a university using open-ended questions. We analyzed whether their experience of practice dissection and other technical training has an effect on their life-death image or not. The students in the school of liberal arts were surveyed about their life-death image by the same method.

This result showed that liberal arts students wrote a similar amount of words regarding both the life image and the death image. But medical students, especially those in the first year, wrote more words about the death image than the life image.

From content analysis of the words about the life-death image of medical students, it was surmised that life and death were both recognized by an almost similar cognitive structure.

---

Department of Psychology